

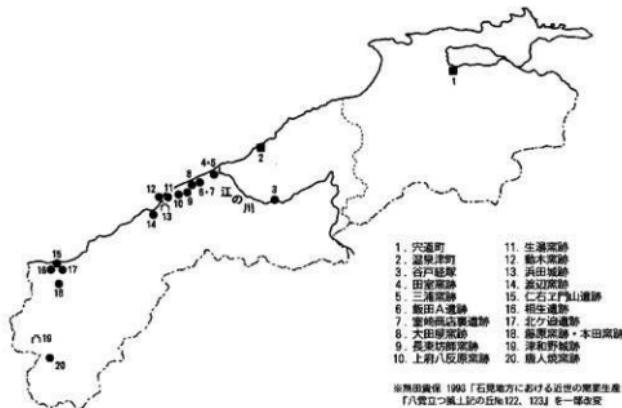
第5章 まとめ

本書で報告を行った飯田A遺跡と長東坊師窯跡は、どちらも操業期間を明確に示せなかった。しかし、この地域では近年窯業遺跡の調査例が増加しており、これらを参考にすればおよその時期は推測できると思われる。とはいえ、現在のところ石見焼は遺構・遺物の変遷はおろか、定義や起源についてもなお定かでない。このため、本章では日用雑器である「丸物」と丸物窯に絞って、発掘資料を中心に一部表掲資料を交えながらその変遷について考えてみたい。

1. 石見地方における近世・近代窯業遺跡の発掘調査

石見地方で最初に発掘調査された近世の窯業遺跡は、鹿足郡柿木村に所在する唐人焼窯跡（文献2）である。この発掘調査では近世初期の窯跡が検出された他、製品・窯道具などが出土している。このほか石見西部では益田市で近世後期から近代の窯業遺跡が5か所で発掘調査されおり（文献11・22）、島根県内では比較的近世の窯業資料の多い地域と言える。

江津・浜田では、近年江津道路の建設に伴って5か所で、それ以外の開発事業に伴って4か所で石見焼関連遺跡の発掘調査が行われている。これらは主に近代以降の窯場で、近世後期に遡る可能性があるものは飯田A遺跡と室崎商店裏遺跡の2か所のみである¹⁸。しかし、両遺跡とも登り窯や窯場木体を発掘していないので、遺構や操業時期に不明な点が多い。また、その他の遺跡も窯場を部分的に発掘しただけで、遺構・遺物の変遷を発掘資料の層位や型式から説明するのは困難である。このため、発掘資料ではないが窯場の変遷を追える浜田市港町動木窯跡の状況や、集落遺跡の出土資料、石見西部の資料を参考にしながら整理する必要がある。



第47図 石見焼関係遺跡位置図

¹⁸ これ以外に大田原窯跡も近世末期に遡る可能性があるが、現在未整理なのでここでは近代前半としておく。また、古八幡付近遺跡の調査区周辺には飯田A遺跡・室崎商店裏遺跡とほぼ同時期の窯場が存在したと思われる。

2. 動木窯跡の近世資料

浜田市港町に所在する動木窯跡は近世後期¹⁰から昭和34年まで継続した丸物窯で、3基の登り窯が確認されている。動木窯跡の発掘調査はこれまでに全く行われていないが、経営者の子孫である三沢治雄氏が窯場の歴史や歴代経営者の墓石等について丹念に調査されているので（文献24）、窯場の変遷などを理解できるこの地域では非常に重要な資料と言える。

確認された3基の登り窯の周辺にはそれぞれ物原が存在し不良製品や窯道具が表採されている。そこで三沢氏は登り窯を基に、出土した遺物の時期を大きく3つに分けている。最も時期が確かなものは第3期の登り窯（下の写真）で、使用期間は昭和34年まである。現在はコンクリート壁の下に埋まっている。次に第1期の登り窯の時期は、大口手前の作業場と思われる平坦地が窯の廃棄後に墓地にされており、その中で最も古い墓に天保9年（1838）の銘が入っているので、新しく見ても19世紀前半までに廃棄されたと考えられる。第2期の登り窯の時期はほとんど手掛かりが無いために不明であるが、立地や物原の不良製品から第1期の登り窯が廃棄された19世紀後半から第3期の登り窯が築かれる間に使用されたと考えられる。

以上のように近世後期に絞られるのは第1期の資料で、登り窯の規模は地表観察で幅約3m、長さ約19mである。窯の出入り口は右側に造られ作業場の幅は約1m、窯の左側には排水用の溝を確認できる。また、第1期の製品のみ未焼成品が表採されている。今回これらの資料を図化・撮影することはできなかったが、飯田A遺跡・室崎商店裏遺跡の製品と形状・器種構成が最も似ているのは第1期製品である。また、長東坊跡窯跡の製品は第2期の資料と非常に良く似ている。



動木窯跡（昭和30年頃）

¹⁰ 文献17によれば動木に窯が築かれたのは文政元年間（1804～1818）のことである。現在墓石を確認できる最も古い経営者は天保9年（1838）に没した定助で、この点は文献17の記述と矛盾しない。

器種 遺跡名	碗・皿類	鉢類						操業期間
		鉢	片口	擂鉢	捏鉢	植木鉢	火鉢・焜炉・七匣	
益田市 仁石立門山遺跡	62-1 62-3 62-5 62-6	62-16 63-3		62-22 62-23	63-7			19世紀初頭
	63-4 63-6	108-2 108-8 108-6 108-14 108-7 108-11	108-10 108-9	109-8 112-3	112-1			19世紀前半
江津市 宝誠商店裏遺跡								19世紀
				37-4				19世紀
浜田市 飯田A遺跡	17-34 17-29 17-35 17-36 17-37 17-31	17-40 17-41 17-44 17-48	17-47 17-51 17-53	17-55 17-54	18-56 18-58	18-60	18-61 18-64 18-62 18-65	20世紀前半
	32-15 32-26 32-14 32-13 35-27	35-22 35-32 35-34 35-35	35-38 35-42	36-51 36-64		37-69 37-70		大正初期 (1912) 昭和40年 (1965)
上村八幡原遺跡	13-13 15-6 20-4	18-1 20-8 11-9	11-10	15-8 20-5	20-8	17-14 13-14	13-19 17-18 17-15	

第48図 石見地方窯業遺跡生産品① (S = 1 / 8)

器種 遺跡名	瓶類	鍋類		水注類	灯明皿・秉燭類	焼台類・窯道具	鉄製具	その他	操業期間
		土鍋	行平						
益田市 仁右衛門山遺跡									19世紀初頭
相生遺跡									19世紀前半
江津市 吉崎商店裏遺跡									19世紀
飯田A遺跡									19世紀
浜田市 長東坊筋窯跡									20世紀前半
上南八反原窯跡									大正年間(1912)～昭和40年(1965)

第49図 石見地方窯業遺跡生産品② (S = 1 / 8)

器種 遺跡名		壺・甕類					操業期間						
益田市	仁古立門山遺跡						19世紀初頭						
相生遺跡								19世紀前半					
江津市	宮崎商店裏遺跡							19世紀					
飯田A遺跡													19世紀
浜田市	長東坊師窯跡												20世紀前半
上府八反原窯跡												大正昭和(1912-1940年) 昭和40年(1965)	

第50図 石見地方窯業遺跡生産品③ (S = 1 / 8)

3. 発掘資料の比較

次に、現在までに調査された窯業遺跡の遺構・遺物を比較検討し、遺構の規模や製品の形状・器種構成から各時期の傾向を考えてみたい。遺構は共通して確認されている登り窯に絞って検討した。また、第48~50図は平成13年1月までに公表された資料を野津清がまとめたものである。

遺構（登り窯）

飯田A遺跡・室崎商店裏遺跡で確認した登り窯は地表観察のみで全容は不明であるが、いずれも全長は15mを越えないもので、幅3m前後、勾配は20世紀代のものに比べ急だった。一般に丸物窯は勾配が緩いとされるが、確認した限りでは宮本氏が指摘するように（文献25）、大型化・緩傾斜化の傾向をみせるのは人止以降のようである[◎]。石見西部の資料を参考にすると、最も時期の占い唐人焼窯跡の窯は全長15m以下、燃焼室の幅は2.6m、勾配は約30度と非常に急である。また、石見空港建設に伴って確認された19世紀の登り窯は、全長は最も長い仁右エ門山遺跡の窯でも20mを越えず、幅も3m前後、勾配は25~30度と比較的急である。勾配が急である点に関しては瓦の生産を行っていたことも原因の一つであろうが、浜田市生湯窯跡（文献18）で調査された20世紀前半の瓦窯の勾配が22度と比較的緩いことから、年代による違いも考えられる。

遺物（第48~50図）

まず、器種の変化が注目される。基本的には古い時代は雑多な日用品を生産していたものが、次第に販売効率の良いものにまとめられていく様である[◎]。安価な磁器に対し競争力の無い碗・皿類が数を減らし、口縁部を凝った鉢は造られなくなる。ランプが普及する時期になると灯明皿のセットが無くなる点などは時代の変化を象徴するものと言えよう。また、新しい時期には1器種内でのバリエーションが豊富になる。擂鉢を例に挙げると、19世紀代の製品は口径30cm前後のものがほとんどだが、長東坊師窯跡や大出屋窯跡の製品には切片円形と從来から作られていた形のものがあり、寸法・口縁端部の形状・擂目の細かさ等のバリエーションが豊富である。

焼き台では「ハリ」の変化が注目される。近世後期の窯で使用されたものは基本的に端部が尖っているが、長東坊師窯跡のような新しい時期の窯では足を貼り付けるものが見られなくなり、端部に切り込みの無いものも現れる。特に円盤に足を貼り付けるハリと円柱状の焼き台は20世紀以降の遺跡で確認されていないので、時期を判断する一つの目安になると思われる。

以上の遺構・遺物の状況から、飯田A遺跡の操業期間は19世紀代に収まり、長東坊師窯跡は20世紀前半を中心とした時期に操業していたと判断される。

4. 江津道路建設に伴う発掘調査で出土した陶器の変遷（近世以降）

筆者は平成9~12年度にかけて江津道路建設用地内（江津市西部・浜田市東部）の遺跡調査に携わってきたが、窯業遺跡以外の遺跡においても近世遺構や近世・近代陶器を確認している[◎]。これらの中には出土状況から大まかに年代を推定できるものがあり、飯田A遺跡・長東坊師窯跡の資料と比較すると、近世後半から近代にかけてこの地域で使用された陶器の変遷を追うことができる。このうち特に変遷を理解しやすかった片口・擂鉢・甕について簡単にまとめておく。

◎ 石見地方で調査した近世・近代の登り窯については、文献19においてスケールを統一した実測図を並べているので参考にしていただきたい。

◎ 当センター間野大丞氏の教示による。

◎ 主な遺跡は敬川町に所在する室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古窯である（文献14）。横路古窯の建物造成土下で出土した資料は、出土状況と肥前系陶磁器の年代から17世紀以降19世紀以前の資料と判断した。

片口の変遷（第49図）

片口は集落遺跡での出土量が多く、ほとんどの窯場で生産されているので変遷を最も確認しやすい資料だった。近世の資料は基本的に敬川町内で出土したものを使用した。

①横路古墓出土遺物Ⅰ（17世紀代）

肥前系陶器の片口で地元の製品ではないと思われる。横路古墓で出土した肥前系陶器には17世紀代の資料があり、これらに近い時期の製品と判断した。口縁部は玉縁状につくり、上面の釉は拭き取っている。注口の接合部分には指で抑えた痕が明確に残る。釉は灰褐色で胎土は茶褐色を呈している。また、小片のため全容が分からなかったので、広瀬町富田川河床遺跡（文献21）で出土した17世紀の肥前系片口を参考にした。この片口は口縁上面の釉を拭き取り、外面の下半は施釉しない。見込みには砂目痕が残る。注口部分は手捏ねで厚みがある。この時期には地元で片口を生産していなかったと考えられる。

②横路古墓出土遺物Ⅱ・古八幡付近遺跡（19世紀以前）

产地不明の陶器である。詳しい時期も不明だが、出土状況から19世紀以前の製品と考えられる。口縁部はやや小さめの玉縁で上面も施釉している。注口部分はやはり手捏ねで、接合は強くなつてける難なものである。写真のものは注口端部を欠損しているが、同じ型の製品で確認するとどれも注口が口縁より上まで高い角度で伸びていた。また、注口の左右に小さな「玉」が付けられる点が特徴的である。高台周辺のかなり広い範囲を施釉しない。見込みには胎上日の痕が残る。

この型の片口は横路古墓で3個体出土したほか、敬川対岸の古八幡付近遺跡でも「玉」が付くもの2個体、付かないもの1個体を確認している。釉や胎土の特徴から在地産の可能性も考えられるが、この型の片口を確実に生産していた窯場は現在のところ確認されていない。

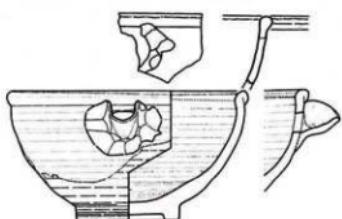
③飯田A遺跡生産品（19世紀代）

発掘調査で出土した資料の中で、確実に地元で生産された最も古い時期の資料と考えられる。また、この頃の製品から大多数の人が「石見焼」として認識するようである。写真の製品は口縁端部の玉縁が小さいが、縦長につくる製品も出土している。注口は②の資料同様に口縁より上まで高い角度で伸びている。しかし、ろくろで作った注口を半分に切って貼り付けるようになり、端部は切り揃えられ、接合部も丁寧に仕上げられる。施釉範囲は②の時期より広がり、高台部位外ほとんど釉がかかっている。写真の製品の内面には第21図108と同じ型の焼き台が貼り付いていたが、写真図版25の片口（53）で確認できるように同時期に足を貼り付けた型の焼き台（写真図版30左下）も使用されるので、目跡は小さい四角形と円形の両方が考えられる。

④長東坊師窯跡生産品（20世紀前半）

江津道路建設予定地内の発掘調査で出土した大正頃の製品はみなこれと酷似しており、この地域の20世紀前半の基本スタイルと言える。③までの片口と比較すると、口径に対し器高が低くなる点が特徴的である。また、高台は径が広がり高さは低くなる。口縁端部の玉縁には同一の窯場の製品でもバリエーションがあるが、折り返した縁がきれいに描っている。注口は短く切られ角度も低くなる。透明度の高い並釉は高台と底部を除く全面にかけられる。また、見込みの目跡はハリ（焼き台）の変化によりほぼ長方形になる。

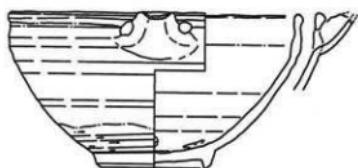
①横路古墓 I (下は富田川河床遺跡)



横路古墓

富田川河床遺跡 (参考)

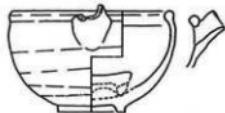
②横路古墳 II・古八幡付近遺跡



古八幡付近遺跡

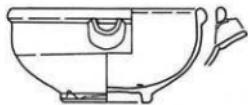
横路古墓

③飯田A遺跡



飯田 A 遺跡

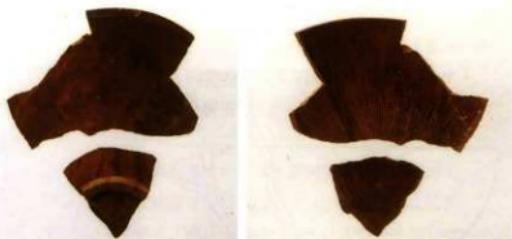
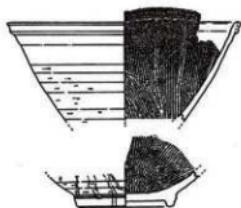
④長東坊師窯跡



長東坊師窯跡

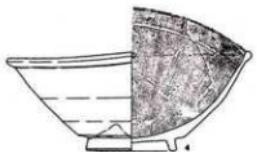
第51図 江津道路建設予定地内遺跡出土陶器片口 (S = 1 / 4)

①横路古墓



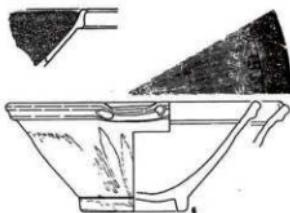
横路古墓

②室崎商店裏遺跡



室崎商店裏遺跡

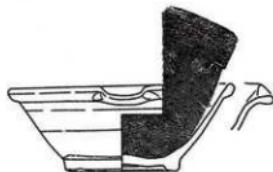
③古八幡付近遺跡（下は北ヶ迫遺跡）



古八幡付近遺跡

北ヶ迫遺跡（参考）

④長東坊師窯跡



長東坊師窯跡

第52図 江津道路建設予定地内遺跡出土陶器標鉢 (S = 1 / 6)

擂鉢の変遷（第50図）

集落遺跡では片口以上に出上率が高く種類も豊富である。飯田A遺跡の製品で全形の分かれる資料を確認できなかったので、19世紀前半の資料には、位置が最も近く操業時期もほぼ同じと考えられる室崎商店裏遺跡出土擂鉢を使用した。

①横路古墓（19世紀以前）

出土状況から19世紀以前のものと判断したが詳しい時期や産地は特定できなかった。口縁端部は外面が帯状に肥厚し、帯の中心部分は水引きにより窪んでいる。片口部分は確認できなかった。内面には11~14条1単位のクシ描きによる擂目が放射状に施される。底部はほぼ平坦に作られ、見込みと高台下面には胎上目の痕が残る。高台部を除く全面にツヤの無い茶褐色の釉がかけられるが、薄いので非常にムラが目立つ。同様の擂鉢は古八幡付近遺跡でも15個体出土しているが、個体差が目立ち、後の製品の様な統一感はない。また、横路古墓の建物床下では、同じ形態で光沢の鈍い暗茶褐色の釉をかけた擂鉢が出土している。これが来待釉をかけた地元産ものであるか判断できなかったが、口縁上面の釉は拭き取られていた。出土状況から岡示した擂鉢に後続する時期の製品と思われるが、こちらは19世紀以後の製品である可能性も考えられる。

②室崎商店裏遺跡（19世紀代）

室崎商店裏遺跡の古墳調査時に、山頂付近の粘土探掘跡で行平・瓶等とともに出土した。登り窓を確認した麓から80~90m離れているが、歪みが大きいのでこの窓場の不良製品で石見焼と判断した。年代については他の窓場の資料と比較した結果、飯田A遺跡に近い時期の製品で、少なくとも19世紀代のものであると判断した。口縁端部は玉縁状につくる。片口は確認できなかった。内面には9条1単位のクシ描きによる擂目が放射状に施される。また、口縁端部から約2.5cm下がった位置に沈線を1条めぐらせ、それより上にはみ出した擂日は撫で消している。底部は平坦で比較的の厚みが無く、見込みに5mm以下の焼き台の跡が残る。飯田A遺跡で出土した擂鉢の内、高台の小さい54でも焼き台の跡を確認したが、これより後の時期の擂鉢が焼き台を使わずに直接重ね焼きされることを考えると注目すべき点と思われる。高台は外に踏ん張るような形狀で、胴部との境界には明確な段がつけられる。高台周辺を除く全面に来待釉がかけられ、釉の境界が甕類のように山形になる点が特徴的である。このほか胎土に砂粒が多く含まれるものこの時期までである。

③古八幡付近遺跡（19世紀代）

古八幡付近遺跡では近世から近代の遺物がほぼ全般にわたって出土しており、遺構外で出土した擂鉢の時期を決定することが困難だった。小片のため全容が分からなかったので、益田市北ヶ迫遺跡で出土した19世紀後半の擂鉢を参考にした。口縁端部のつくりは①と良く似ており、端部から約3cm下がった位置に沈線を1条めぐらせて擂目を撫で消すところは②と良く似ている。内面には荒い擂目が密に施される。底部は中心が盛り上がり、見込みには焼成時に上に重ねた擂鉢の高台跡が残る。飯田A遺跡55の擂鉢で確認したが、これ以降の擂鉢は焼き台を使用せずに重ね焼きするようである。写真の擂鉢は焼成温度が低かったため釉の発色が暗いが、基本的に来待釉は明るい茶色である。また、胎土にほとんど砂粒を含まなくなるので、表面の仕上がりは滑らかになる。

④長東坊師窓跡生産品（20世紀前半）

全体に③と似ているが、口径に対し器高の低いプロボーションになる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。内面の擂目は細かさに種類があり、口縁端部から3cm下がった位置までの擂目は撫で消すが、

沈線は入らない。底部は中心が盛り上がり、見込みには高台の跡が残る。高台は③までと比べて径が広がり高さは低くなる。赤みのある米待釉が高台と底部を除く全面にかけられる。

壺の変遷

飯田A遺跡の製品は「タテブチ」(頸部)が高く、スマートな形態をしている。江津市地場産業振興センターに展示されている近世の壺(肩部の「流し」は5か所)や、川本町谷戸経塚(文献4)出土の壺(肩部の「流し」は9か所)は、いずれもタテブチが高く開き気味である。飯田A遺跡の製品は「流し」の数が後の製品と同じ3か所だが、これらに口縁の形態が似ており古い様相のものと考えられる。一方、長東坊師窯跡で生産された壺はL字が大きく寸胴気味である。これは量産と入れ子に都合良くするため、年代の判断できる他の資料を見ても大正以降はほとんどこの形態になるようである。

5. おわりに

江津道路建設に伴う石見焼関連遺跡の発掘調査では、年代の異なる複数の遺跡から得られた多数の資料が図化・撮影された。これにより他地域の製品や年代の分かる資料と比較することが可能になった。一方、課題も多く残されている。今回の調査では偶然にも道路建設予定地から僅かに外れていたが、古い時期の登り窯は規模が小さく残存状況が悪いので立木伐倒前の地表観察で窯場を確認するのは極めて困難である。これに加え、石見焼陶器製造業組合が設立された明治36年(1903)以前の文献は非常に少なく、分布調査の際、残存状態が良く聞き取りなどで確認しやすい大正以降の窯場の分布・伝承に惑わされて古い時期の窯場を見落としやすい。周知の窯業遺跡でなくとも未焼成品や盛鉢・窯道具などがセットで表探できたり、出土する場合は未確認の窯場が存在する可能性が高いので注意が必要である。特に、近代以降の登り窯に比べ小規模で勾配も急なので、予想外の位置で確認される可能性もある。また、製品は各時代毎の変遷が、なお明確でない。江津・浜田以外の地域の発掘資料も含めて、地域や遺跡の枠に注意しながら検討して行かねばなるまい。

近年、この地方の地場産業だった石見焼について、改めて評価し研究する動きが見られる。これらの研究は近代以降についてはかなり進んでいるが、文献資料が少なく聞き取りや分布調査が困難な19世紀中頃以前の状況については不明な点が多い。このため、発掘調査による具体的で確実な資料の増加が望まれている。今後はさらに資料化を進めるとともに、単に窯業遺跡の資料に限って検討するのではなく、集落・古墓・生産遺跡等の発掘資料も含めて比較・検討すべきと思われる。

また、石見焼は海運を利用して全国に販売していたとされるが、発掘調査によって石見の丸物が出土したという報告は極めて希である。これは石見焼の認知度が低く、図化・撮影された資料が少なかったことによるものと考えられる。今回の報告では当地域で生産された丸物を可能な限りカラー写真で掲載したので、島根県内はもとより県外の方でも石見焼の出土例を確認された方は、情報を島根県埋蔵文化財調査センターにお寄せいただければ幸いである。

連絡先 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 松江市打出町33 TEL.0852-36-8608 FAX.0852-36-8025

E-mail maibun@pref.shimane.jp

報告書抄録

フリガナ	イワミヤキカンレンイセキチヨウサホウコクイチ イイダエイイセキ チョウトウボウシカマアト						
書名	石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）						
副書名	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V						
卷次	1						
シリーズ名	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	V						
編著者名	東森 晋・野津 清・寺尾 令						
編集機関	島根県教育委員会 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 電：0852-36-8608㈹						
発行月日	西暦2001年3月30日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ○○° ○' ○"	東経 ○○° ○' ○"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯田A	島根県江津市 二宮町	32207		34° 58' 04"	132° 11' 15"	1997.7.30～ 1997.10.21	1,000	道路 建設
長東坊師窯跡	島根県浜田市 上府町	32202	L119	34° 56' 27"	132° 10' 32"	1998.8.03～ 1998.10.26	1,400	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
飯田A	窯跡	近世	丸物窯 作業場 建物 土坑	1 2 3 6	陶器、磁器、金属器、古銭、ガラス瓶			
長東坊師窯跡	窯跡	近代	丸物窯 作業場 土漉し場 建物 土坑	1 1 1 1 10	陶器、磁器、金属器、古銭			

**石見燒闌遺跡調査報告 1
(飯田 A 遺跡・長東坊師窯跡)**

一般国道 9 号江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 V

発行 2001 年 3 月

編集 烏根県教育庁埋蔵文化財調査センター
鳥根県松江市打山町33番地

印刷 印黒潮社